

温泉発見伝説——岩手県花巻市鉛温泉と猿——

菱川晶子

温泉 発見伝説 鉛温泉 始祖伝承 猿

多くの温泉地に伝えられている温泉発見の由来を語った伝説は、早くから注目を集めて分類が試みられてきた。これまでに示された温泉発見伝説の分類案には動物の関わるものが共通してみられるため、動物の関わる伝説は発見伝説の中でも重要な位置を占められると考えられる。本稿ではその一例として白猿に由来するといわれる鉛温泉を取り上げ、開湯の歴史や伝承を辿った。その結果、温泉発見伝説の背後に落人伝説があることや、一族の始祖伝承に関わる形で発見伝説が語られてきたことを明らかにした。

一、はじめに

(1) 世界でも有数の温泉国である我が国では、多くの温泉地に温泉発見の経緯や由来を語った伝説が伝えられている。この温泉発見伝説は民

俗学でも早くから注目を集め、最も早いものでは高木敏雄が『日本伝説集』⁽¹⁾の「縁起伝説」に取り上げている。また柳田國男も『山鳥民譚集』⁽²⁾や『日本伝説名彙』⁽³⁾等で動物名の付いた温泉とその由来について記し、白鷺や鹿等は古来霊物であり、神主や僧侶が発見者の場合には土地の神仏の使者伝令とされるのは当然のことだと述べている。

一方『温泉大鑑』⁽⁴⁾の中で「温泉の信仰と伝説」を記した加藤玄智と宮坂光次は、「発見伝説」を次のように分類している。一つは「猟師・樵夫・亡命者等によって発見された温泉」、また「鳥獣に教えられた発見した温泉」「神仏に導かれて発見した温泉」「高僧に発見された温泉」「偉人に発見開湯された温泉」「山姥・天狗等変化物の湯」「温泉の冷却と移動に関する伝説」というように、内容によって詳細に七分類している。そして「鳥獣に教えられて発見した温泉」では、「鳥獣などにも、自然泉や温泉をめぐって集まり、好んでこれに浴する風習のあることは、まぎれない事実である」と述べ、信心深い昔の人はそれを鳥獣の習性とは考えずに神仏の使者や化現と考えたと指摘して



図1 藤三旅館正面入口 木立の中に木造三階建ての建物が聳える

いる点は注目される。鳥獣が自然泉や温泉に浴するのは習性によるものであり、さらにいえば本能に基づく行動と理解できるだろう。その後も山口貞夫の四分類⁵⁾を始め、いくつかの分類案が示されているが、それらには共通して「動物が教えた」、あるいは「導いた」とするものがみられることから、動物の関わる伝説が温泉発見伝説の中でも重要な位置を占めているとみて間違いない。筆者はこの温泉発見伝説と動物との関係のみていくことで、動物に対する人々の思考の歴史の一端が明らかになると考えている。

本稿では、数年來調査を進めてきた岩手県花巻市にある鉛温泉を取り上げる。鉛温泉は盛岡藩主が湯治に訪れたことのある歴史ある温泉であり、風光明媚な情景を描いた画帖『鉛村八景』も残されている。大木の根元に湧く湯で白猿が傷を癒していたと伝わる鉛温泉の発見伝説について、湯の歴史を辿りながら考察を試みることにしたい。

二、湯口の概況と鉛温泉

現在は花巻市湯口区にある鉛温泉だが、古くは稗貫郡湯口村に属していた。この湯口区の北西部は奥羽山脈に連なる山間地に当たり、南東部の平坦地には農村が広がっている。町には北上川支流の豊沢川が南東流し、その川に沿っていくつかの温泉が湧き出ている。花巻駅寄りに順にみれば、松倉温泉、志戸平温泉、大沢温泉、山の神温泉、高倉山温泉、鉛温泉、新鉛温泉となる。鉛温泉と新鉛温泉の間には、昭和四十七年までは西鉛温泉もあった⁶⁾。この他に近年新たに湧出した温泉もあり、奥羽山脈の溪谷沿いに点在する温泉地帯を総じて花巻温泉郷と呼んでいる。

豊沢川沿いに湧く湯の中でも古くから知られているのは、志戸平温泉と大沢温泉、そして今回取り上げる鉛温泉である。この鉛温泉には藤三旅館という一軒宿のみがあり、旅館は自炊部と旅館部の二つに分かれている(図1・2)。湯治部の姿が古いものではあるが、旅館部の建物も昭和十六年に建てられた、総檜造りの三階建ての木造建築である。これに新館と、昨年建てられた洋風の別邸から藤三旅館は構成されている。

鉛温泉の名にある鉛は、近在に金山や銅山があったためにあえて付けられたものだとされている⁷⁾。鉱山への山師達の出入りを阻止するためである。それだけ一攫千金をねらう人々が多かったということなのだろう。

現在の浴場は、白猿の湯、銀の湯、白糸の湯の三つだが、昨年の改築前には伝説にちなんだ桂の湯もあった。湯から見える白糸の滝は、農業用水からできた滝であったために、元は沢田尻の滝と呼ばれていた⁸⁾。

「白猿の湯」は昔ながらの浴場であり、湯船の深さから立位浴の形をとる珍しいものである(図3)。古い形態の温泉がそうであるように、



図2 豊沢川から見た湯治部

湯が下から自然湧出する浴槽は、豊沢川の水位に関連して低い位置にある。そのため、入口からすぐに長い階段を下っていく。一つは女性用に、またもう一つは男性用の入口になっている。昔から続く混浴の浴場である。

鉛温泉の泉源は、昭和四十八年には上の湯（目の湯）と中の湯（白銀の湯）、桂の湯（白猿の湯）、下の湯、藤の湯の五つがあった。このうち白猿の湯が唯一の自然湧出であり、他は動力揚湯である。また、多くの湯が四十五度前後の泉温であるのに対して、下の湯は少し高い五十六度であった。地域一帯には流紋岩とみられる熱源岩の分布が認



図3 白猿の湯 広い空間の中に楕円形の浴槽が佇む。深い湯船では立位浴の形をとる。近年は女性客専用の時間帯が設定されている

められ、湯の泉質は主として弱アルカリ性単純高温泉となっている。⁹⁾湯の主な効能は、リウマチ性疾患や神経痛、神経麻痺等である。

三、鉛温泉の変遷

ここで、いくつかの資料や聞き書きを元に昔の鉛温泉の様子を探るところにする。

鉛温泉の最も古い姿が描かれているのは、画帖「鉛村八景」になる。「鉛八景画帖」とも呼ばれる。¹⁰⁾慶応二年（一八六六）の春に、藩主である南部四十世利綱公が湯治のため鉛温泉を訪れた際に作らせた画帖である。いつもは台温泉へ湯治に出かけていた利綱だが、この年は手に怪我を負っていたために、傷に良いという評判の鉛に湯治に来たのである。¹¹⁾

「鉛村八景」は、同行した文人等の侍臣と共に利綱公が鉛温泉附近の景勝地を八つ選び、それに因んだ和歌が詠まれている。序に続いて、

烏帽子森紅葉、鉛村炊烟、高倉山夕立、大森山清水、桜橋行人、豊澤川新流、澤田澤飛滝、阿弥陀巖残雪の八景が、落ち着いた色調で描かれている。

絵は盛岡藩お抱えの狩野休意と金谷桃溪の二人が四景ずつ担当し、「鉛村炊烟」は休意の筆による。背後に高く山が聳え、遠くに樹々が煙つてみえる。いくつかの平屋の建物の間から湯煙の上る、風情ある情景である。絵の右手には、多くの人が訪れる様を詠んだ将在の「湯あみ人絶えぬもしるくおきつもの なまりのむらにた、てるけぶり」の歌も配されている。この「鉛村八景」は、案内を勤めた安浄寺が懇請して拝領し、現在に至っている。

少し時代が下った明治時代の鉛温泉を描いた絵がある(図4)。手前に流れる川と背後に聳える山との間に、多くの建物がひしめくように建っている。建物の多さは「鉛村八景」にみた絵とは大きく異なっている。三十年間の変化であろうか。中央にある二階建ての建物は、白猿の湯と思われる。その建物を取り囲むようにしていくつもの宿が並んでいる。

その後時間が流れて大正十四年(一九二五)年になると、花巻温泉電気鉄道が花巻駅から西鉛温泉まで開通する。これによって旅客を運ぶ手段は電車へと大きく変わるが、電気鉄道は昭和四十四年まで運行され、その後はバスがこれに代わっている。

図5は昭和初期の鉛温泉の様子を写したものである。豊沢川沿いに建物が並び、茅葺きの建物もみえる。手前にある木造の橋は、僅かに丸みを帯びて太鼓橋のようである。多くの人が行き交っている。図6の方は豊沢川からみた藤三旅館である。裏側に当たるが、三階建ての大きな建物であるのがわかる。豊沢川の様子から察するに、あまり水量の多くない時期のようだ。

図7は、写真と同時期の鉛温泉の建物の位置を示している。旅館に

長く勤めていた女性からの聞き書きによる。図が示す通り、駅から見て左手にある藤三旅館の他に、藤友旅館と藤徳旅館、また安浄寺の旅館の四軒から構成されていた。これを見ても、白猿の湯を取り巻くように建てられていたのがわかる。藤三旅館が本家に当たり、初代からの分家と二代目からの分家が、それぞれ藤友旅館と藤徳旅館になる。安浄寺旅館があるのは、藩主湯治の時の功によって土地と鉱泉権が与えられたためと伝わる。

大正一五年の資料に拠れば、藤三旅館が八畳五十室、藤徳旅館が四十二室、藤友旅館が九室、安浄寺旅館が二十五室となり、これら四

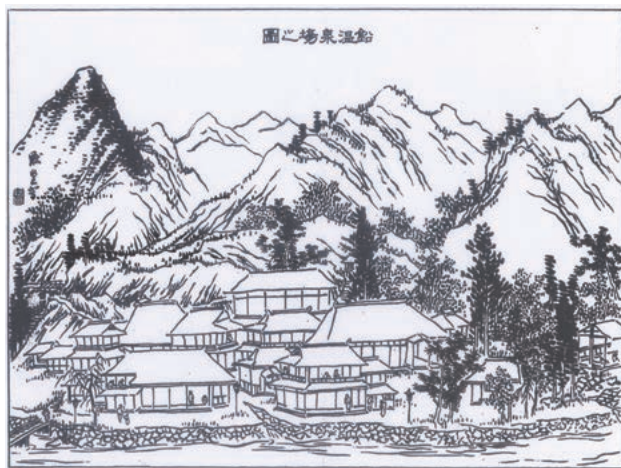


図4 鉛温泉場之図(『岩手県鉱泉誌』国立国会図書館蔵・デジタルコレクションから)。黙堂写とある



図5 昭和初期の鉛温泉 (藤三旅館提供)



図6 昭和初期の藤三旅館 (藤三旅館提供)

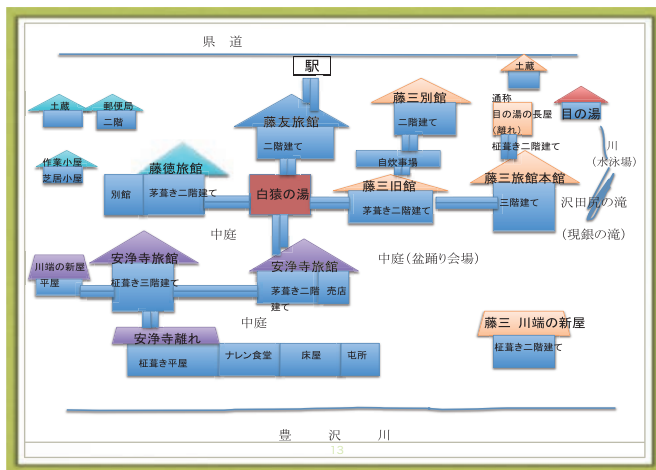


図7 昭和初期の鉛温泉全体像

軒の収容力は、合わせて一四五人にのぼる。土用の丑の日には湯の効能が高まるとのことから、殊の外多くの客が集まったようだ。部屋には入れず、廊下のゴザの上にごろ寝をする人も出たほどだったという。客人は県内の遠野や沿岸方から多数を占め、農閑期には長期に滞在者もみられた。

湯は、空気に触れた瞬間に変わる生きものだといわれる。季節や天候によって変化し、一昔前の白猿の湯は、一日のうち緑や青、赤といったように七色に変わることがあったと伝えられている。朝六時に白い湯が出ることもあり、その時には宿ではカランカランと鐘を鳴ら

しながら、「あー、葉湯が出たよ」と部屋を回って知らせていた。また夜にも温泉が変わることがあり、やはり客を起こして入らせることもあったという。客人の滞在をより良いものにしてしようという宿の心意気を感じる。

地震の後にも温泉の色は変わることがあり、白猿の湯は銀色のような色に見えたり、牛乳風呂のような色になったりすることもあった。銀の湯でも硫黄分が多く出る変化が起きている。温泉と地層とのつながりを強く感じさせる現象である。

このような湯の効能に加えて、女将自作の漬け物がサービスされた

のも、人気を集めた要因の一つだったようだ。多くの人をもてなしてきた鉛温泉を大きく変えたのは、昭和十三年の大火だった。

火事によって藤三旅館側が全焼してしまったため、関係者が相談を重ねた末に旅館は株式会社として一つにまとまることになる。昭和十七年のことである。前年に再建されていた建物を中心とした、本家の藤三の名前を引き継いだ今の藤三旅館が誕生する。なお、この時に安浄寺は旅館業を廃業し、それ以後は関与していない。安浄寺は、八世円誓の寛文十一年（一六七一）に花巻市鍛冶町に移っている。

再建間もない、昭和二十年頃の鉛温泉の様子を記した一文がある。釜石から家族とやって来た旅人が、花巻から一時間余り電車で揺られて駅に降り立ったところである。

駅の前面豊沢川の溪流に添って全く夢想だにしなかつた三層楼の大きな旅館が眼を奪う。出迎えの番頭さんに荷物を頼んで、だら／＼坂を下り表玄関に案内を乞う。先着の姉に迎えられて指定の部屋に通されたが、大部屋を改造したと思われ仕切は壁のない板張りで二間の押入と炉が切つてある十畳敷で床の間もない殺風景な部屋であつた。八畳間に四五人も入込みされる新館の自炊部と比較すれば天地の相違であり階上に新設した鷹の湯に近く、目の湯、藤の湯の中間にある玄関側の庭園に面した東南向の日当りのよい場所にあつて、たま／＼電車の騒音と浴客の出入が邪摩マヤになる程度で静養には支障はないと思つた。

三層楼の大きな建物が強い印象を与えているのがわかる。鉛温泉の名前から抱いていたイメージとは大きく違つたようだ。階上に設けられた鷹の湯に、目の湯や藤の湯もあつたのがわかる。旅館部の部屋は自炊部に比べてゆつたとりしていたようだ。鉛温泉の客層や設備については次のような記述がある。

一泊千金を投げる日温泉と違い湯治客の殆どが肉体的に故障のある連中で占められているので、此所には人間的に差別も階級意識もなく、富めるものも貧しきものも一視同仁、全くの民主的な療養本意に作られた所であり、周囲には二軒の雑貨店と一軒のそばやと民家が二三あるだけで一見不自由な土地に思うが、旅館内にある四カ所の売店と理髪店、郵便局も廊下伝いに利用出来るし温泉医学研究所には医師が出張して何時でも診察がしてもらえる行届いた施設があるので安心して保養が出来る。

旅館部三十室、自炊部百三十室、外に会議室娯楽演芸場があつて定期的に映画の上映もあり東北巡業の芸能人が屢々保養と慰安の興行が催され、浪花節、漫談、シヨウに楽団演奏、芝居映画と今月に這入つて六回も公開された。これは館主の特別な配慮によるもので演芸場の使用料から出演者の宿泊料まで一切無料でサービスするために最近競つて此んな草深い土地へ訪れる傾向があると言ふ。

鉛温泉は療養のための宿であり、客の間に階級意識はないとある。皆が体の故障を治癒するために滞在している、湯治宿本来の姿がみえる。売店や理髪店、また郵便局が揃っているのは、昭和初期からのようである。先の図7と比較して変化がみられるのは、温泉医学研究所という医師の診察が受けられる診療所ができていた点だろう。旅館に滞在する人々が必要とするすべてのものが集まっているといえる。

自炊部の方が旅館部よりも圧倒的に規模が大きいのは、自炊しながら療養する人々がそれだけ多かつたことを物語っている。娯楽演芸場では定期的な映画の上映や催し物が出され、長期滞在者の興を惹いていたようだ。演芸場の使用や宿泊代をサービスすることで、多くの芸人をこの地に呼び込んだ、宿主の知恵が窺える。先をみよう。

土用の丑の日の入浴が最も効目があると言う慣わしで此の日を期して村の青年や主婦達の主催する宴会が本館の広間や新館で二三組もあり、朝から賑やかな太鼓の音に合せて郷土色豊かな盆踊りや田植踊りで底抜け騒ぎをやっている。夕日が沈んで庭のボンボリに灯が入る頃野ら帰りのお百姓さんや勤人が一日の汗と疲れを目の湯や桂の湯で一掃して行くためか「汚れた手足はキレイに洗ってから入浴して下さい」とか「便所の下駄を持ち出さぬように」と珍らしい注意書が掲げられているのを見ても浴客の階層がうかがわれる。

(中略)

滞在二週間の内、賑やかな酒宴の歌声を聞かぬ日は珍らしくK町の消防団、I市の民生委員会、M村の土地改良委員等々、連日宴会が続く。

前述した通り、土用の丑の日には湯の効能が高まるといわれたことから、村の人々がごぞつてやつて来ていたようだ。地元の青年や主婦達の宴会が催されて、盆踊りや田植踊りが行われている。村人に関わらず、賑やかな酒宴は連日のように行われており、湯に入り馳走を食して楽しむ人々の様子がみ取れる。

目の湯は川沿いに離れてることから、野良仕事帰りの人も多く利用したようだ。現在も敷地の一面に地元の人への無料の温泉場が設けられている。昔から地域の人々に開かれた、また親しまれた旅館であったのがわかる。

旅人にはあまりに賑やかで、静かな療養は叶わなかったようだが、次のようにも述べている。

真面目に自炊生活をしている人達から受ける人情の美しさにはこれを補つてなお余りあるものがあつた。此所では社会的な地位も身分も一文の値打がなく、富めるも貧しきも多少の相違はあつても同じ間代

を払い同じ食事を取つて同じ浴場に通っている。お米が無ければ互に譲り合い、お菜も飯物も分けあつて愉快な生活を営む共助の精神は自炊生活を通してのみ味わえる境地であると思つた(後略)。

湯と共に触れる人情は、旅の醍醐味でもある。一軒宿だけに人々が一所に集中し、賑わいも増幅されていた鉛温泉だったが、その一方で、助け合いながら自炊生活を楽しんでいた人々の様子が伝わってくる。

四、鉛温泉の発見と歴史

藤三旅館は温泉発見の由来を、次のようにパンフレットやホームページに紹介している。

今から六〇〇年程前、当館・藤井家の遠い祖先が高倉山山麓でキコリをしている時に、岩窟から出てきた一匹の白猿が、カツラの木の根元から湧出する泉で手足の傷を癒しているのを見て、これが温泉の湧出であることを知り、一四四三年頃に仮小屋を建て、一族が天然風呂として開いたと伝えられています。

その後、大衆の浴場とするべく一七八六年に長屋の浴場を建て温泉旅館として開業したのが始まりです。

このように温泉開湯当時の状況から「白猿の湯」と呼ばれるようになっていきます。

藤三旅館の遠祖が高倉山山麓で樵をしていた時に、白猿が桂の木の元から湧く泉で手足の傷を癒しているのを見たのがきっかけだったとある。初めは一族の天然風呂として利用されていた湯は、三百年余り後に大衆浴場へと姿を変える。一七八六年に長屋の浴場が建てられ、



図8 小祠に祀られた猿 伝説の象徴的な存在となっている (2012年撮影)



図9 温泉の由来が知るされた扁額 絵も描かれており目を引く



図10 小祠の薬師如来像 温泉神社が雪で倒壊したために薬師如来像がこちらに移された。以前祠に納められていた木造の猿は、祠の右側に置かれている (2015年撮影)。猿よりも薬師如来像の方が重要視されているのが面白い

伝説にちなんで「白猿の湯」と呼ばれてきたのがわかる。

この白猿を祀った白猿神社が、白猿の湯の浴場近くにある(図8)。小祠と猿の木像は、旅館の関係者が京都から取り寄せて祀ったものがあり、祠の上には温泉の由来を記した扁額も掛けられている(図9)。これらの二つは、鉛温泉の来歴を人々に知らせる役目を果たしている。扁額の詳細については後述する。

鉛温泉の伝説については、次の二文献にも確認ができた。一つは、明治二八年(一八九五)に刊行された『岩手県鉱泉誌』である。近隣

うにある。

鉛温泉

鉛温泉は寶曆年間邑人藤井三右衛門なる者發見せしといふ然れとも未だ浴場を設けざりしに其子三之助天明六年に誤て負傷せしことあり試みに雨露を凌の仮小屋を設け此の湯に浴せしに奇效ありて創傷忽ち癒れり茲に初めて浴場を創開の志あり越て天明八年に家屋を構造寛政元年に湯壺を改良し同六年に家屋を改造せしと言ふ後寛政十二年五月三之助の子三右衛門なる者浴場の東七十坪の土地を安浄寺へ寄附し享和元

年に三之助の弟徳之丞に浴場の東南十五坪餘の土地を興へて分家せしと謂ふ然るに文化八年七月二日浴場に祝融の災あり舊記ハ概ね焼亡やけど今原いまはらに由なし

宝暦年間に邑人の藤井三右衛門が湯を発見したとある。宝暦は一七五一年から一七六三年の頃である。発見の経緯についての記載はない。その後湯に関わることなく時が過ぎ、その子に当たる三之助が負傷したことから、試みに仮小屋を設けて湯に浴したところ、傷が忽ち癒えたので、湯の効能を知ったという。天明六年（一七八六）のことである。藤井氏の自家では、長男が三右衛門と三之助の二つの名を順に襲名しているのがわかる。藤三旅館の名は、藤井の藤と長男の名の三から付けられた名称だったわけである。

天明八年（一七八八）には浴場を開く家屋を造り、寛政元年（一七八九）に湯壺の改良、また同六年（一七九四）には家屋の改造を行っている。その六年後の寛政一二年（一八〇〇）には、三之助の子である三右衛門が、浴場の東七〇坪の土地を安浄寺へ寄付している。理由については記されていないが、これが安浄寺旅館に繋がるのだろう。さらに享和元年（一八〇一）には、三之助の弟の徳之丞に浴場の東南一五坪余の土地を与えて分家させている。これが後の藤徳旅館であり、この頃に鉛温泉は大きく発展していったのがわかる。藤友旅館に関わる記述はない。しかし、文化八年（一八一二）七月二日に祝融の災、すなわち火災が発生したため、舊記は失われてしまったようだ。本書にはまた続けて、次のようにも記されている。

一説に在昔此地に大なる桂樹あり因て桂の湯といふ一日白猿傷来て浴せしに忽癒に去りしより白猿の湯とも唱へり然るに地主照井大學の女性静淑なるを好み浴客の日に多きを厭鶏卵を以て湧口を塞たるよ

り客も亦来らざりしに多くの星霜を経て地主藤井三之助なるもの再び湧口を尋ね得て天明七年安浄寺の應専和尚に就き郡代に請ふて得て浴場を開きたりと言ふ

温泉発見の伝説が記されている。桂の大木があり、白猿が来て浴したところ傷が忽ち癒えたので、桂の湯とも白猿の湯ともいうとある。一つの湯を長らく二つの名で呼んでいたのは、この伝説に拠るのがはっきりとわかる。

地元の人照井大學の娘が浴客の喧しいのを厭い、湯の湧き口を鶏卵で塞いだところ客が来なくなつたという。これは『温泉大鑑』の分類にあつた「温泉の冷却と移動に関する伝説」に該当するものである。なぜ客が来なくなつたのかははっきりと書かれていないが、その後「多くの星霜を経て地主藤井三之助が再び湧口を尋ね得」たとあることから、温泉の湧出が止まつてしまつたということなのだろう。湯の湧出する場所を故意に汚して湯を止めたというわけである。

鉛温泉の湯が止まつたという話は他の文献にはないため、突然一つの伝説が付加されたような違和感がある。鉛温泉が芸人の集まる温泉地であつたことを考えれば、他所の話が入つてきても不思議ではない。地元にも多くみられる照井の名前が出ていことから、少なくとも旅館に直接関わらない近在者の喧嘩への思いが、この伝説には表れていると考えられる。

湧口を見つけた藤井三之助が天明七年に安浄寺の應専和尚に就いたと記述にはあるが、安浄寺によれば、藤井氏が住職に就いたという事実はないようだ。しかしこの年号は、先の記述にあつた温泉開湯の年に当たるため、郡代の許可を得たという点では不自然さはない。

では、安浄寺と藤井氏とのつながりは、どのようなものなのだろうか。実は『岩手県鉾泉誌』にはまだ続きがあつた。次の通りである。

慶應二年に盛岡の土枋内達吉氏来り浴せしとき温泉に題せしものあり開始を識るの一端ともなるへけれハ茲に記さん

題鉛郷温泉

自圀城南不遇十里至疆上有一支城稱花卷即藩屏之一也城西里程若干有村曰鉛温泉出馬俗稱曰鉛湯此地昔有一桂樹因或稱曰桂湯一日白猿被傷来浴不日而愈去故又有白猿湯之目當時来試疾者莫不有驗也地土照井大學者有一少女性貞靜節誦浴客日多以鷄卵塞泉眼自此絶而客亦不来也後經星霜幾而微見泉眼地主三之助者欲再得其泉而探討圖至遂得之于時真宗安浄寺十一世應專羅疋久馬乃来浴得其驗應專者始祖藤井氏（自註略）者其眷屬也（後略）

慶應二年に盛岡の土枋内達吉氏が鉛温泉に來た時に記したとある。慶應二年といえ、利綱公が鉛温泉で湯治した年である。確かにこの人物は「鉛村八景」の序を記していることから、利綱公の來湯の折りに温泉の由来や鷄卵の伝説を知ったと理解できる。前掲の「一説に」以下の文は、この「題鉛郷温泉」に拠ったのがわかる。なお、これらを紹介した人物は、案内を務めた安浄寺当主である。

本文で注意を引くのは、藤井氏が眷屬だと記されている箇所である。眷屬には従者、家來の意味がある。ここでもう一つの資料である『湯口郷土誌』をみよう。次のように記されている。

由来

今から凡そ五〇〇余年前、当温泉主藤井家の遠祖が高倉山麓において薪樵の折、白猿が岩窟から出て桂の木の根元から湧き出ている湯で手足の傷を癒しているのを発見し、これが温泉の湧き出であることを知り、嘉吉三年（一四四三）の頃に仮小屋を建て、一族が天然風呂として用いたと伝えられている。

因に藤井家の遠祖稗貫城主藤原千夜又丸の三男兼忠公が円万寺膝立村を賜り、膝立藏人と名乗り、その子膝立彈正輝忠公（後の花卷安浄寺の開祖）の郎党で輝忠公が永享十二年（一四四〇）江刺勢と私闘して利あらず、当鉛村に敗走して来て、寺小屋を開塾し、またその郎党は附近の林野を開拓し、木樵百姓などに變じ世を忍ぶ生活を営んでいたといわれている。その後、宝暦年間（一七五〇年頃）、子孫の三右エ門が大衆の浴場とすべく安浄寺住職のはからいで役司の許可を得、当時の大飢饉・震災等の苦難を克服しながら天明六年（一七八六）の代となつて初めて長屋を建て、温泉旅館業を開始したと言われている。

先にみた記述より古い温泉発見である。白猿の関わる経緯は同じだが、発見は約五〇〇年余り前であり、嘉吉三年（一四四三）頃に仮小屋を建てて一族が天然風呂として用いていたとある。藤三旅館のパンフレットにあった年と同じである。これによく似た内容の資料がもう一つある。次に示す。

鉛温泉の由来

今から約五百余年前、

当温泉主藤井家の遠祖が高倉山麓に於て薪樵の折白猿が岩窟の中より出で桂の木の根元から湧出する泉で手足の傷を癒して居るを発見、これが温泉の湧出であることを知り、嘉吉三年の頃假小屋を建て、一族が天然風呂として用いたと伝えられている。

因に、藤井家の遠祖は稗貫城主藤原千夜又丸の三男業忠公が円満寺膝立村を賜り膝立藏人と名乗り其の子膝立彈正輝忠公（後の花卷安浄寺開基）の郎党で輝忠公永享十二年江刺勢と私闘し利非ずして当鉛村に敗走

来り寺小屋を開塾し、またその郎黨は附近の林野を開拓し、木樵・百姓等に変じて世を忍ぶ生活を営んでいたものという。其の後宝暦年間子孫の三右エ門が大衆の浴場となすべく安浄寺住僧のはからいにて役司の許しを得当時の大飢饉・震災等の苦難を克服し天明六年子三之助の代となり初めて長屋を建て温泉旅館業を開始せりという。

これが即ち薬泉靈湯として世に名聲の高い鉛温泉天然風呂「桂乃湯」別名「白猿の湯」の由来である

天保十二年九月 客人那須川義武之書

より記す

安浄寺藤立泰全師述

昭和二十六年七月

聡禎書

これは、藤三旅館の支配人を務めていた人物が、昭和二十六年に安浄寺の巻物を写して扁額に書かれたものである。巻物の所在は詳らかではない。天保十二年（一八四一）の年号と客人那須川義武の名もみえるが、詳細は不明だ。『湯口郷土誌』の内容とほぼ等しいのは、本書がこの巻物、もしくは写しに拠ったためであろう。

さて、これらの資料で注目されるのは、藤井家遠祖にまつわる記述である。遠祖は稗貫城主藤原千夜又丸の三男業忠公のようにも読めるが、円万寺藤立村を賜った藤立藏人の子藤立弾正輝忠公の郎党とも読める。輝忠公は、後の花巻安浄寺の開祖とある。

永享十二年（一四四〇）に江刺勢と私闘した後に鉛村に敗走し、輝忠公は寺小屋を開塾する。またその郎黨は附近の林野を開拓して、木樵百姓などに身を変じ世を忍ぶ生活を営んでいたとある。これまでみてきた伝説に鑑みれば、藤井家の遠祖は輝忠公の郎党と理解できよう。

木樵とは、身をやつした姿だったのである。では、資料にもあった安浄寺ではどのように伝えているのだろうか。縁起の前半部を次に示す。

縁起（安浄寺）

抑々安浄寺開基弘教坊ハ藤原氏ニシテ山陰中納言藤原為家朝臣ノ三男三河中納言二位中山五郎稗貫為重公第七世ノ苗裔稗貫千夜又丸ガ孫也始メ千夜又丸ガ三男業忠殿田満寺藤立村ヲ賜ハリ藤立藏人ト云ヘリ

其ノ嫡男弾正輝忠事ニ由リ江刺氏ト争ヒ利非ヅシテ鉛ニ走ル

無情転変ノアリサマヲ観ジ世上榮利ノ交リヲ厭ヒ頻リニ浮沈ヲ遁レントスサレドモ

未ダ有縁ノ知識ヲ求ムルニ由ナク空シク年月ヲ送りケリ

（熊谷章一『花巻市史（寺院篇）』傍線筆者）

傍線箇所をみよう。千夜又丸の三男業忠殿が田満寺藤立村を賜って、藤立藏人と名乗ったとある。その嫡男である弾正輝忠が、江刺氏と争い破れそうになって鉛に敗走したというのは、『湯口郷土誌』や扁額の内容と違うところはない。もともと本縁起は、安浄寺開基四五〇年忌に当たって昭和十五年に作られた新しいものである。

資料にあった千夜又丸だが、稗貫千夜又丸という人物の名が史実に見える。瀬川稗貫氏の系図では、輝忠の別名を持つ政直の名もある。花巻市湯口の田満寺の鐘銘には、稗貫の郡主として千夜又丸の名が記されているが、系図では少し異なっており、早世したとある。千夜又丸という人物は確かに実在したようだが、幼名である点等から子孫を残したかどうかは定かではない。

現在藤三旅館の当主を勤める藤井祥瑞氏は、十二代目に当たる。実際に聞き伝え聞いている伝説は次の通りだという。

鉛温泉の由来

なぜそこまで辿りついたのかというと、このあたりは稗貫郡でした。うち、藤井といいますが、昔稗貫城主の三男の方の家臣をしていて、江刺軍と戦って負けたので逃げて、一時はここ湯口地区にある円満寺って、円満寺の近くに流れて来て、また奥にということでこの鉛地区に流れて、三男を守るために土着したという。

殿様を守りながら、樵をしながらいる時に、この豊沢川で傷ついた手を猿が癒していたので、何だろうなと見たら、温泉が湧き出ているのがルート。白い猿というのを取って「白猿の湯」に。

十三、四年前に二、三匹の白猿が現われたのを当時の区長さんがビデオに撮ったことがあった。白猿の子孫なのではないかと言ったりしていた。

発見した湯は、自分達の湯として使っていたんですけど、これを広めようということで、創業が、宿として「藤三長屋」として始めたらしいんですけど。それが天明六年（一七八六）。花巻の商工会議所の営業登録でいえば、寛政八年（一七九六）というところまでは調べてわかったんですけど。

安浄寺さんの名字が膝立というんですが、円満寺の近くに膝立って地名があるんですけど、これは間違いないだろうな。長屋時代には安浄寺旅館というのがあった。それが今の湯治部の側で営業していたんです。

安浄寺の住職は、膝立の姓を名乗っている。つまり、『湯口郷土誌』や安浄寺縁起等にあった「輝忠公は円万寺膝立村を賜り、膝立藏人と名乗り」の通りになる。鉛地区に多くみられる藤井氏は、稗貫城主の三男を守るために鉛の地に逃れ付いた家臣の姓であり、その後主人を敵から守りながら樵に身をやつしている時に、白猿を見かけて湯の湧

出を知ったといわれているのがわかる。稗貫城主の三男が千夜丸なのかどうかは不明だが、主人と共に鉛の地に隠れ住んでいたのは確かなようだ。仮小屋を建てたのが嘉吉三年とあったのは、鉛地区に住んでいた当時の年を指しているようだ。移り住んで間もなく湯の湧出を知ったのか、一族の歴史を記憶に留めるためにこの年号を伝えているのか、そのどちらかだろう。

そして、寛政一二年（一八〇〇）に三之助の子である三石衛門が、浴場の東七〇坪の土地を安浄寺へ寄付したとあったのも、単に経営権取得の礼だけではなく、長く主であったことが大きな理由と考えられる。鉛温泉で藤井氏一族と安浄寺が共に宿を営んでいたのは、主と家臣という強い繋がりがあったためだと理解できる。

五、まとめ

多くの温泉地に伝えられている温泉発見伝説だが、これまで示されてきた温泉発見伝説の分類には動物の関わるものが共通してみられることから、動物の関わる伝説は発見伝説の中でも重要な位置を占めていると考えられる。

今回、白猿に由来するといわれる岩手県花巻市の鉛温泉の歩みを文献や聞き書きによって分析した結果、藤井氏が一族で営んできた鉛温泉の背景には、思わぬ落人伝説が隠れていたことがわかった。山深い地で主を守りながら身を潜ませる生活の中で、初めて温泉の発見が可能になったともいえる。一見すると樵が登場する普通の伝説と見做しがちだが、詳細に辿ることで藤井氏一族の族祖伝承でもあることが明らかになった。本稿は、鉛温泉の発見伝説の深層に、わずかながらも光を当てることができたといえる。

また、温泉発見のきっかけとなったのは、傷ついた猿との出会いで

あった。白猿の白は靈威の強調とも考えられるが、一方でアルビノや、年老いた猿の場合もある。多くの動物がそうであるように、老いた猿の体毛も次第に白色化していく。当主の話では、十三、四年前にも旅館近くで二、三匹の白猿が目撃されたことがあり、これを見た人々は白猿の子孫なのではないかと語っていた。鉛温泉の人々にとつて、白猿は身近な隣人ともいえる存在のようだ。野生の猿が湯に入る様子は、今日でも長野県の地獄谷温泉で目にする事ができる。

猿の湯浴みを見て人々は温泉のありかを知り、猿がこれを教えてくれたと考えたようだ。感謝の念をいつまでも記憶に留めるようにと、長く湯の名前に白猿を付してきた。桂の湯とあったのも、これと同じ考えによるものだろう。温泉は自然からの恩恵によるものだという思いがここには窺える。このように、鉛温泉の発見伝説は鉛温泉を守ってきた藤井家の族祖伝承であると共に、自然界の動物や樹木と人の素朴な繋がりを、今に伝えてくれるのだと理解できる。

【註】

- (1) 高木敏雄『日本伝説集』郷土研究社一九一三。後に宝文館出版(山田野理夫編一九九〇)等からも復刻版が刊行されている。同書一八二―一八六頁。
- (2) 柳田國男『山島民譚集』甲寅叢書刊行所一九一四。後に『柳田國男全集』第二卷(筑摩書房一九九七)等に収録。同書三九六頁。
- (3) 柳田國男『日本伝説名彙』(日本放送協会編・日本放送出版会一九五〇)二五三―二五六頁。
- (4) 日本温泉協会編・刊『温泉大鑑』一九三五。後に改題改訂版の『日本温泉大鑑』(博文館一九四一)が出されている。同書六五六―六八一頁。
- (5) 山口貞夫「温泉発見の伝説」(『旅と伝説』第一〇巻一―号一九三七)一三―一九頁。
- (6) 湯口郷土誌編集委員会編『湯口郷土誌』(湯口村誌改訂増補 花巻市湯口公民館一九八九)二五五頁。

論説

- (7) 二〇一二年七月一八日現地調査。
- (8) 二〇一二年七月一八日現地調査。
- (9) 『鉛温泉・西鉛温泉および新鉛温泉地域温泉総合科学調査報告書(昭和四八年度)』(岩手県・花巻市一九七三)六・七・三三頁。
- (10) 『第3回企画展 花巻の文人達―歌人と俳人』(花巻新渡戸記念館一九九二)四〇頁。
- (11) 前掲書に同じ。利綱公は翌年三月にも鉛温泉で湯治しており、その際に逍遙した大沢温泉も気に入って、「大沢八景」を作っている。鉛温泉は傷によく効く湯として著名であったため、旧傷が癒えない利綱公は前年に続けて再び湯治に訪れたのである。
- (12) 前掲書註10の文献に同じ。
- (13) 鈴木守三『岩手県鉱泉誌』河北堂一八九五。内題には『岩手県鉱泉誌内志戸平大沢鉛西鉛温泉記』とある。出典は国立国会図書館デジタルコレクションに拠る。
- (14) 前掲書註6の文献に同じ。
- (15) 二〇一二年七月一八日現地調査。
- (16) 『東北の温泉』(仙台鉄道局運輸課編・刊一九二六)三〇・三一頁。
- (17) 同県北上市にある夏油温泉の大湯でも、同じ現象がみられる。早朝は湯が白濁していることがあり、時間の経過と共に湯は透明に変化していく。
- (18) 二〇一五年七月二八日現地調査。
- (19) 二〇一一年八月一〇日現地調査。同年に起きた東日本大震災の時には大地がズキンと揺れ、後に全ての湯の色が茶色になったという。
- (20) 二〇一五年七月二八日現地調査。藤井家は宮沢賢治の母の出た家であり、旅館の土地の一部は現在も宮沢家の所有となっている。
- (21) 熊谷章一『花巻市史(寺院篇)』(花巻市教育委員会一九六二)九三頁。
- (22) 若林榮治『鉛温泉』(『雑文クラブ』第三巻第七号 雑文クラブ一九五一所載)三〇―三二頁。以下の引用は全てこれに拠る。著者は、釜石で電気機械商店を営む人物である。
- (23) 前掲書註13の文献に同じ。以下の引用も全てこれに拠る。八丁表・八丁裏。
- (24) 二〇一四年九月二八日聞き取り調査。
- (25) 前掲書註6の文献に同じ。
- (26) 二〇一一年八月一〇日現地調査。
- (27) 前掲書註21の文献に同じ。

(28) 『稗貫氏探訪 稗貫氏八百年顕彰記念誌』（稗貫氏八〇〇年記念事業実行委員会編・刊一九九五）一〇九頁。なお本書では政直の没年は天正三年とあり、五代前の祖先道隆の兄千夜又丸は、応仁二年（一四六八）に亡くなったとある。

(29) 金子定一「稗貫家の研究（二）」（『猿ヶ石叢書』第四三巻第三八輯 東和郷土研究会一九六五所載）一七頁。松井道圓『和賀稗貫郡村志』（『早池峰文化』第一二号大迫町教育委員会編・刊二〇〇〇所載）七三頁等。

(30) 二〇一五年七月二八日現地調査。

〔附記〕

鉛温泉の調査では、藤三旅館の藤井祥瑞氏と藤井裕子氏、安浄寺の藤立氏に大変お世話になりました。ここに御礼申し上げます。また、お話を聞かせていただいた照井マツ様には、感謝と共に心からご冥福をお祈りいたします。